



星を帯びし者/The Riddle-Master of Hed
(1976)/パトリシア・A・マキリップ(脇明子訳)/
早川書房(文庫・7/31冊・
¥380)

サイエンス・ファンタシイという、新分野(？)がある。SFには、ハード以来、“ヒロイック・ファンタシイ”——剣と魔法の世界——が、既にある。だが一方、トールキン以後の童話風、神話風の物語も、昨今一種のブームを呼んでいる。それが“サイエンス・ファンタシイ”なのだ。ただ、ヒロイック・ファンタシイが、原点のハードと違っているように、この分野も、トールキン流の設定や構成を用いながら、多くの点で微妙な差異が見られる。

ヘドのモルゴンは、三つの星を額に印され、世に生まれた。それがなければ、彼は農耕国の王として、一生を平和に終えたかもしれない。しかし、運命は、遠い過去から定められていたのだ。三つ星の刻まれた堅琴、剣に秘められた謎とは？——やがて、“偉大なる者”の世界を揺るがす、騒乱が巻き起こる……。

この手のものの書き手に、注目を集めている、新人女流作家が多いのは、よく知られた事実である。

中でもマキリップは、ストーリー重視の組み立てで、とにかく面白く読める。もったいも、その分、細密な世界描写は少ないが。

(俊)